・《王職》自分ひとりでの過ごし方ではなく、共同体として人との関わりの中で振り返る。すべての人が、自分の属する共同体の中で何らかの影響力(支配力)を周りに与えており、その意味で「王職」を担っている。人を大切にする関わり方とはどのようなもので、キリストの「王職」を担うために何が必要かに気付く。

『中間報告』該当箇所
↓

7．信徒はどんな役割を担うの？

(1．3)信徒の役割)

[項目のねらい]

信徒が、それぞれが生活している場でキリストからゆだねられた使命を果たさなければ、ほかにその役割を担う人はいない。そういう意味で、その人の役割は不可欠である。

◇分かち合いのポイント◇

・現代世界憲章第1項「真に人間的な事がらで、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない」にあるように、自分が心を動かされた出来事を振り返ることによって、自分が関わるべき奉仕の場を確認する。

・十分に関われていない事柄についてどのように関わるか(特に社会的な事柄について)は、この場で解決は見いだせなくても、今後の課題として確認できればよいだろう。
共同体として共通した課題が出てくれば、それを共同体全体のものとし、今後の養成・研修のテーマとすることもできる。

8．そんなちから、どこにあるの？

(2．2) a.カリスマ)

[項目のねらい]

すべての信者に、それぞれ異なった固有の賜物(カリスマ)が与えられている。それは目立ったものであってもあまり目立たないものであっても、その人なりの奉仕を担う力となる。

◇分かち合いのポイント◇

・各自、3つの質問のうち答えやすいものを選んで答え、同じグループの中で分かち合うこともできる。(どの質問でも基本的に同じような振り返りになるため)

・振り返りにおいては、たとえば語学力があるというような能力(タレント)の問題よりも、自分が何に心を動かされ、何に興味・関心を強く持ったか、という点に注意を向けるようにする。

注:「カリスマ」と「タレント」は区別の難しい点もあるが、「タレント」はより具体的な技量・能力を意味し、「カリスマ」は「聖霊の賜物・恵み」といわれ、心に働きかけるものとして、その人らしさを表すものと理解できるだろう。
また、「カリスマ」の語は、一般に「特異な才能」のように理解されている面があるため、このプログラムにおいては「固有の賜物(カリスマ)」と表記している。